

## 20年後の記憶

フランスの小説家プルーストが『失われた時を求めて』にくりかえし書いていたのは、あるとき人が何かのきっかけで思い出した記憶の方が、ずっと忘れず大事にしていた記憶よりもその記憶本来の姿をとどめている、ということであった。つまりこれは人の記憶がどれほどもろいもので、意識の影響を絶えず受けることによって、その姿を変えていくものであるかということを示しているのだけれど、そのような記憶のもろさを自分自身が実際に思い知らされると、やはり改めてそのことに驚かざるをえない。

『小さな恋のメロディ』というイギリス映画がある。厳格なパブリックスクールに通う13歳の少年少女を描いたその映画を、僕は確かに16歳の時に観た。そして今までずっと記憶にとどめてきたと思っていた。だが20年あまりの歳月を経て改めてその映画を観たとき、実際に画面で映っている映画は僕の記憶のなかにあるものとはまるで違って、僕は映画の題名を思い違いしていたのではないか思ったほどだった。

映画のあらすじは次のようなものだ。主人公のダニエルはパブリックスクールに通う中学生で、職を探している父親と少し見栄っ張りの母親と一緒にロンドン郊外に暮らしている。ある日女子生徒のバレエの授業を親友たちと一緒に覗き見していたダニエルは、そこで出会った同学年のメロディに一目ぼれをする。放課後、彼女のあとをつけたりして何とか仲良くなろうとするダニエルに、メロディも次第に魅かれていき、やがて二人はロンドンの中心部でデートをしたりするようになる。ある時メロディの家を訪れたダニエルは、生活力の無い父親のいる彼女の家庭に漂うどこか重苦しい閉塞感のようなものを感じ、学校を休んでメロディと二人で海への小旅行に出かける。そのことを校長に咎められた二人は結婚を決意し、同級生たちも授業をボイコットし、廃屋で二人のために結婚式を挙げようとするが、それに気づいた教師たちは結婚式を阻止しようとする。廃屋にやって来た教師たちに生徒たちはついに反撃を始める。親友の助けもあって彼らの追跡を振り切った二人はトロッコに乗って廃屋を後にする。

あらすじからもわかるようにこの映画の主題は、サッチャー首相登場以前の不況にあえぐイギリス社会や、子供を抑圧する大人社会という背景があるにせよ、紛れもなく二人の純粋な恋愛感情だ。この映画に出てくる、少女たちが集まる墓場の薄気味悪さ、主人公二人がそれぞれの楽器で一つの曲を演奏する時の暗い部屋に差しこむ淡い陽の光、二人で一つのリンゴを食べるときの灰色の空、そういった細部は確かに僕の記憶と一致していた。だが僕の記憶にあった『小さな恋のメロディ』は、宿題を忘れたといっっては体罰を与え、ことあるごとに子供を自分たち大人の価値観に押し込めようとするパブリックスクールと、そこから逃れようとする少年少女を描いた映画、いわばトリュフォーの『大人は判ってくれない』のような大人の作り上げた管理社会への反抗の映画だった。いつのまにか僕の記憶の中で、少年少女の恋愛というメインテーマと、大人社会への反抗というサブテーマがすっかり入れ替わって、本来の映画と

はまるで別の映画のようになってしまっていたのだった。僕がこの映画を最初に見たときとりわけ印象に残っていたのは、ラストシーンでトロッコに乗って教師を置き去りに走り去っていく二人である。いま改めてこの映画を初めて観たときのことを振り返って思うのは、そうした錯覚を生んだのは僕の意識、映画の中の二人のように大人の管理から逃げ出したいと思っていた当時の僕の願望に違いないということである。

僕が『小さな恋のメロディ』を初めて観たのは、ホームスクールという学校の夏季合宿で行った宿泊施設でのことだった。ホームスクールとはその前年に高校受験に失敗した、いわゆる中学浪人のための予備校で、松本市の女鳥羽川沿いにある3階建ての建物に、当時は松本市だけではなく安曇野や諏訪の方から約200人あまりの生徒が通っていた。1980年代後半、団塊ジュニアと呼ばれた僕らの世代の生徒数は年々増える一方で、同時に中学浪人の数も著しく増加していた。実際、僕が受けた高校の競争率は1.25倍ほどで5人に1人は受験に落ちる計算になる。とはいえ、それなりの自信を持って臨んだ受験での失敗は、15歳の僕にとってはやはりショックな出来事だった。結果発表を見て家に帰ってきた僕を父親はドライブに誘った。仕事中毒とも呼んでいい父親が仕事を休んで僕を車に乗せている、そのことに僕はなぜか申し訳ない気持ちになったのを覚えている。試験の出来が特別悪かったわけではなく、思い当たる原因は一つしかなかった。高校の合否は試験の点数と調査書と呼ばれる中学3年間の評価点数によって決まることになっていたのだが、僕はその調査書の点が著しく悪かったのだ。自業自得といえれば確かにそうなのだろう。中学の頃の僕は、教師の言うことを信じず、宿題も出さず、テスト勉強もほとんどしない無気力な生徒だと思われていた。だが、もうすでに知っているのに何回も書かされる漢字や英単語、生徒の生活を管理するための日記、そうした自分にとっては無意味だと思われるものを行うことを僕は拒絶したのだった。その結果が志望校合格には全く足りない調査書の点数と受験の失敗だった。私立高校との併願が制限されていた当時、受験に失敗した僕は二次募集ある高校へ行くか中学浪人をするかの二択を迫られた。僕はこれからいくら努力してももう変えることのできない調査書の点数に不安を感じながら、中学浪人としてホームスクールで一年を過ごす方を選択したのだった。

ホームスクールでの生活は中学校以上に厳しいものだった。月曜から土曜まで毎日同じように国語、数学、理科、社会、英語の授業がくりかえされ、体育や美術といった受験の役に立たない授業は一切行なわれず、祝日はなぜか天皇誕生日や建国記念日といった日が休みになる一方で、子供の日や体育の日には通常通り授業が行なわれた。毎月行なわれる試験の結果は入口ロビーに大きく張り出され、その順位によってクラスが上がったり下がったりしていた。制服は中学校の制服を着ていく規則で、僕は黒の学生服を着ていたのだが、朝、ジーンズにネルシャツといった私服を着て自転車で高校に通学する中学校の同級生の姿を横目で見ながら、ホームスクールに徒歩で通わなければならないのは心にこたえた。自分がいまここでやっていることは本当に報われるのだろうか？僕は何度も自問自答していた。不安感と苛立ちが常に心の中にあった。

夏休み前の授業が終わると、長野県の南端にある阿南町の宿泊施設に1泊2日の合宿があった。それは一年間の学校生活で唯一といってもいい課外授業だったが、学校になじめない僕は友人も少なく、24時間クラスメートと一緒に過ごすことは僕の気を重くさせるだけだった。朝、松本を出発し2時間ほどで宿泊施設に着くと、生徒たちは8人部屋に振り分けられ、さっそく集会、オリエンテーリングなどのレクリエーション、夕食と時間通りにスケジュールがこなされた。その後、部屋に戻るとしばらくの自由時間が与えられた。男子生徒が何人か集まれば話題になるのは先生の悪口や女子生徒の話だったが、そういった話には僕は適当に話を合わせ、曖昧に頷いているだけだった。しばらくすると生徒全員が大広間に集められた。何も知らされていなかった生徒たちのざわめきには、これから何かが始まるのだという期待感と不安感が入り混じっていた。眉の太いどんぐり眼をした国語の教師が僕らの前に出てきて言った。「これから映画を観ます。皆さんの生まれた頃、1971年に作られた映画です。楽しんでください。」そうして始まったのが『小さな恋のメロディ』だった。久しぶりに僕は映画の世界に没頭し、ラストシーンで教師に反旗を翻すパブリックスクールの生徒たちに自分を重ねていた。映画を観ているあいだ、そして部屋に戻って眠りにつくまでのあいだ、僕の中でまるで自分がその生徒たちの反乱に参加したかのような高揚感があった。20年後に映画本来のテーマであるメロディとダニエルの純粋な恋愛のことを忘れてしまうほど、厳格な校則のパブリックスクール、生徒たちの集まる墓場や音楽室の光の暗さ、イギリス特有の重苦しい空の色、そして彼らの反抗の印象は鮮明だった。

その半年後、僕は運よく再挑戦した高校に合格することができた。二度目の結果発表で感じたのは嬉しさではなく、トロッコに乗った二人が感じていたであろう、「これで僕は自由だ」という安堵感だった。それにしてもなぜ生徒を取り締まる側の教師たちが、なぜあえてこの映画を僕たちに見せたのかは、いまもってよくわからない。教師たちも学校側から強制される管理教育に疑問を感じていた、と僕としては思いたい気持ちもあるのだが。

こうしていまホームスクールに行っていた頃を振り返ったとき、完全に過去のこととして、あの一年間は精神的にきつかったなと思うだけで、特別何か心が揺れるようなことはない。意外に思われるかもしれないが、中学校の調査書の点が悪かったことに後悔もしていなければ、中学浪人をしたというコンプレックスも感じていない。それは高校ではホームスクールの頃とは一転して、僕は多くの友人に恵まれ充実した生活を送ることができたせいだろう。彼らは僕が中学浪人をして一年入学が遅れていなければ、おそらく出会うことのなかった友人たちだ。もちろん高校に落ちなければ、それはそれでまた違った友人が出来ていだろうが、中学浪人をしなかった僕の高校生活が、自分が実際に送った生活よりも満足のいくものになったかどうかといえば、おそらく実際以上のものにはならなかっただろうと思う。僕が中学浪人に対して抱いていた悪い記憶は、高校生活を経ていつのまにか中和され変わってしまっている。これもまた20年の時間を経た記憶の作用だろう。過去に起きてしまった出来事は変え

することはできないが、それをどうとらえるかは未来の出来事を変えることができる。  
記憶のもろさというのも案外悪いことばかりではない。